

# 圧倒的な説得力で、前人未踏の仮説を展開

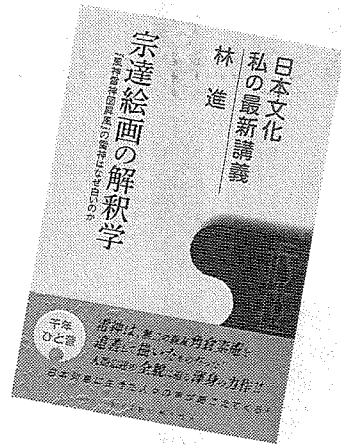
宗達の風神雷神という有名な傑作が、いかなる意図の下に制作されたか

稲賀繁美

林進 著

## ▶ 宗達絵画の解釈学

『風神雷神図屏風』の雷神はなぜ白いのか  
4・15刊 四六判320頁 本体2800円  
敬文舎



宗達の風神雷神といえは、切手や教科書に頻繁に登場する。およそ日本で教育を受けて、知らぬ者などあるまい。だがそもそも風神と雷神を対にして描くことも、この作品が最初の作例だったらしい。またこの作品を宗達の真筆とする根拠も、実際にはけっして確固たるものではなかったのだという。それどころか、本書は、この有名な傑作がいかなる意図の下に制作されたかについて、前人未踏の仮説を展開する。それも、従来未知の新史料を駆使し、これまで定説の読みを斬並みに覆し、宗達晩年の社会的地位の

栄達や、その周囲の人間関係に周到な復元・考証を施したうえで、圧倒的な説得力をもった仮説である。本書の達成を簡単に三点に整理する。まず図像学的な解釈の刷新。つぎに文献史料と作品との突合せ。最後に「追善」という目的にそった作品制作の意図の復元。そこでは学芸員としての多年にわたる勤務が育んだ思わぬ出会いや、書誌学から植物学に至る広範な知識という裏打ち、さらには禍を福に転じる機嫌までが、作者を稀有な発見へと導いてきた。

まず図像に関する推理だが、著者は『源氏物語関白繪標図屏風』との比較から、落款のない『耕作図屏風』を宗達筆と推定する。田植への情景に描かれた牛が、牛車を牽く牛を左右反転したものだから。この作品の農夫の足が雷神の足に重なり、宗達筆の根拠となる。また『田家早春扇面』の茅葺屋根の田舎家が、良弁出生譚を含む『執金剛神縁起絵』上巻一段からの転用だったことは、つとに山根有三が指摘している。だが著者

は民俗学知識からそれを産屋と見破り、のどかな春の情景に潜む無常観の異様さを抽出する。さらに『犬図扇面』も、『九相持絵巻』の描く死骸を喰う犬を引き写しつづ、腐乱した遺体だけを画面から消去していた。生死の実相を隠蔽する、この宗達の巧緻は何を意味するのか。本書は次いで、宗達晩年の栄達の背景として、後水尾院と東福門院の周辺へと探索をすすめる。当時の朝廷には幕府とのただならぬ確執があった。讓位後に完成する新仙洞御所が、文化サロンとなり、宗達に活躍の場を提供した。著者は一九九八年に出現した屏風を、「おせん丸宛一条兼退書状」に記述の見える『楊梅図屏風』と同一とし、それを後水尾の美母、中和門院の追善を意図して依頼された作品と推定する。書状の再解釈は卓抜であり、そこには、仙洞御所焼亡に上の失われたと信じられてきた幻の作品の姿が浮かび上がった。今では著名な『猿蓑宗達』だが、現在までの定説は昭和年代以降の古文書発掘に負

う。だが著者は従来典拠とされた「少庵書状」に疑念を呈し、かわって一九九〇年に初公開された『素庵書状』を頼りに、宗達の居所を京都鴨川の東、「二六原」の周辺に推定する。「二六道の辻」周辺は現世と来世との分岐点。ハレとケの交錯する結界の地に「猿蓑」はあった。

著者は『伊勢物語図色紙』第三九段「女車の笛」の裏に隠されていた宗達自筆の作画指示メモの発見（二〇〇九年）をきっかけに、宗達と角倉兼庵との交流を復元し、それに立脚して『風神雷神図屏風』に、素庵への追善という作品の意図を解明する。なぜ雷神は白い肌を晒し、頭に黄金の二重の鉢巻を締めるのか。なぜ風神と雷神とは、二曲一双の画面の両端に居て、中央の金地は空白に残されたのか。本書評でまた謎のまま残してきた細部も、こころすべてが噛み合っているだろう。

その謎解き連続は、読者の愉しみに委ねたい。（国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学）